

(様式2)

I 学校の概要

アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業

坂出市立加茂小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全 校
1学級 28名	2学級 41名	2学級 38名	2学級 40名	1学級 27名	1学級 32名	2学級 6名	11学級 212名

○教員数 18名

◆学校の特色

本校区は坂出市の南東部に位置し、交通の便のよさから10年程前より宅地造成が進められ、住宅地が急激に増えてきている。地域の人々や保護者は本校の教育活動に対して協力的で、健全育成のための様々な取り組みを実施し、子ども会活動や地域の体育的活動も盛んである。児童は素直な子が多く、家庭・地域の教育力を得て加茂小学校の児童としてすくすく育っている。

一昨年度は、県教委の研究指定「思考力等の育成モデル校事業」を受け、ものの見方・考え方についての研究を深めた。昨年度は「アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業」を受け、自分のものの見方・考え方に偏りはないかどうかを友達との主体的・対話的な相互交流の中で自己省察できるように、授業や特別活動の内容を工夫しながら研究を進めてきた。

今年度も引き続き「アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業」を受け、昨年度の実践を継続しながら、子ども自身が多面的・多角的なものの見方・考え方を身につけることにより、望ましい自尊感情が育つのではないかと考え、研究を継続している。

II 研究主題等

研究主題

学びの深まりが実感できる教育活動の創造II

－ ものの見方・考え方を広げ、深める指導方法の工夫 －

◆研究主題設定の理由

以下の表は、県の児童質問紙の項目(6)「自分にはよいところがあると思いますか。」の過去3年間の本校児童の回答結果と県平均の割合を表したものである。3年前は「思う」と回答する自尊感情の高い児童が多かったが、日々子どもたちの言動を見ている教師から評価すれば、それは自分に甘い回答だとしか思えなかった。

	現中学1年						現第6学年						現第5学年			
	H28		H29		H30		H28		H29		H30		H29		H30	
	県平均	4年	県平均	5年	県平均	6年	県平均	3年	県平均	4年	県平均	5年	県平均	3年	県平均	4年
思う	34.4	43.3	36.8	40.0	35.6	31.0	37.2	28.1	35.6	31.3	36.6	31.3	38.2	51.7	34.8	44.8
どちらかといえば思う	35.3	50.0	33.4	43.3	35.5	51.7	32.8	31.3	34.5	46.9	33.2	40.6	33.3	20.7	33.9	44.8
あまり思わない	22.4	3.3	21.8	3.3	21.1	10.3	22.2	34.4	22.5	18.8	22.1	25.0	21.3	20.7	23.5	6.9
まったく思わない	7.6	3.3	7.8	13.3	7.7	6.9	7.5	6.3	7.2	3.1	7.8	3.1	6.9	6.9	7.5	3.4

そこで、研究指定を受けて、自分の言動に対する評価が客観的なものかどうかを考えさせたり、さらに友達との交流の中でメタ認知させたりする指導を行ってきたことにより、平成29年度と30年度を比較すると、

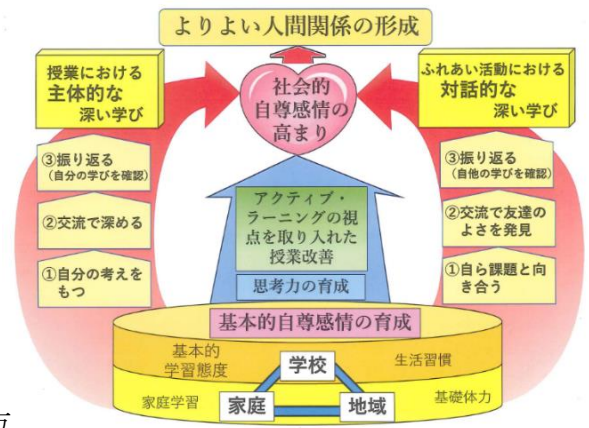
現中学1年生で「思う:40%→31%」が減少し「どちらかといえば思う:43.3%→51.7%」が増加、現6年生は「どちらかといえば思う:46.9%→40.6%」に減少、現5年生は「思う:51.7%→44.8%」が減少し「どちらかといえば思う:20.7%→44.8%」と、全体的に厳しい自己評価の回答へと変容が見られるようになってきた。これは、どの学年においても自分の行動を客観的に評価しようとする正しいメタ認知力が培われつつあるからではないかと推測することができる。このように、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れ、自ら考えをもって複数の友達と意見交流する中で、自分や友達のよいところをお互いに認め合い、「ものの見方・考え方」がより客観的なものになるよう取り組んできたことは、基本的な自尊感情を社会的な自尊感情に引き上げるのに大変有効な手段であることが分かった。

そこで本年度も、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るため、昨年同様、授業と特別活動（ふれあい活動）の両面からの実践を継続し、正しい社会的自尊感情の育成の研究を深めていきたいと考える。

◆研究内容及び方法

研究の内容については、昨年度同様、授業と特別活動の2本の柱を中心に、特に本年度は、「振り返り」に力点を置いて研究を深めた。

- 1 授業における主体的な深い学びをめざす活動
 - ・ 自分の考えをまとめるための支援
 - ・ 学びの深まりを実感できる交流場面の設定
 - ・ 振り返り（リフレクション）の時間の確保
- 2 特別活動における対話的な深い学びをめざす活動
 - ・ 興味関心を高める課題設定の工夫
 - ・ 友達のよさを見つける交流場面の設定
 - ・ 友達のよさや自分のよさを振り返る評価の在り方



特に授業においては、以下のようにできるだけ学び方を学ぶ思考ツール等の活用を取り入れた。

思考ツール等の活用方法を工夫した授業

応用する	比較する・分類する	順序立てる	関係づける
<p>【5年算数 平行四辺形の面積】</p> <p>今までに習った図形の面積の求め方が使えないかな。</p>	<p>【3年算数 あまりのあるわり算】</p> <p>どれも式は同じですが、余りの処理の仕方で2通りに分けましょう。</p>	<p>【2年国語 ビーバーの大作事】</p> <p>この順番が違っていたらビーバーのダムはできるかな。</p>	<p>【4年算数 面積】</p> <p>複雑な図形も長方形や正方形をつくることで求めることができるね。</p>

また、若い担任が多い本校（20代5名・30代1名・50代5名）においては、教師自身に自分の実践を振り返るメタ認知の大切さを理解させ、常に以下の項目を意識して授業を実践するように働きかけている。

- 思考ツール等の活用方法を工夫し、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業であるか。
- 観点や視点を明示して子どもたちに考えさせ、友達の考えと交流する中で、お互いのよさを認め合わせ、話し合い活動の価値に気付くように働きかけているか。
- 視点を定めて振り返りを行い、自分の学びの深まりが実感できるように工夫しているか。
- ふれあい活動（朝活動・縦割り活動）では、異学年のよさをたくさん見つけて称賛できているか。

III 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1 (教員質問紙) 児童の多様な考えを引き出したたり、思考を深めたりするような発問や助言等をしていますか。

指標 「①行っている+②どちらかといえば行っている」の合計



1 教師自身の「ものの見方・考え方」を広げ、メタ認知能力を高める

(1) 自分の性格特性を知ること

4月当初の現職教育で、アメリカの心理学者エリック・バーン博士が創始した「交流分析」という人間関係の心理学理論に基づいて作られた性格診断テスト「エゴグラム」をしてもらうようにしている。これは、自分の性格特性を知り、そういう自分の性格を踏まえた上で、どのように子どもに接すればよいのかをメタ認知してもらう機会を取るようになっている。自分の性格特性を知ることによって、子どもへの注意の仕方や問題行動をとった子どもへの理解の幅が広がり、結果的に教師力の向上につながっている。

因子	項目	特性
因子	理念力	お父さん度 支配的な親
	支援力	お母さん度 養育的な親
	論理力	大人度 合理的な大人
	活発力	やんちゃ坊主度 天真爛漫な子ども
	協同力	いい子ちゃん度 従順な子ども

(2) 考え方の道筋を示すこと

教師は、授業中、子どもたちに「よく考えなさい」と指示することがあるが、子どもたちにとっては「何をどのように考えたらいいのかわからない」という場合が多い。そこで、「よく考えなさい」ではなく、「○と◇を比べると何が違うかな(対比)」とか「○と◇を比べると似ているところは何か(類比)」と、具体的に簡単を示して聞く。そして、そういうふう似ているところや違うところに目を付けて考える考え方を「比較」というのだと教える。このように考える観点を教えることは、一つの教科だけでなく、他の教科にも応用できる基本的な思考法だと考え、何度も繰り返し教えて定着するように努めている。

児童の発達段階と系統性を加味した思考力を培うための「教える言葉」一覧 (第3次案)

ものの見方・考え方 (AとBの組合せ)	A すべての思考の土台となる観点 ↓ B 誰の視点(自分・相手・周りの人)で考えるのか	五感(視覚, 聴覚, 臭覚, 味覚, 触覚)と言葉(言語) 時間の流れ(過去・現在・未来) 空間の広がり(家族・幼稚園・小学校・中学校・職業選択)	
教える言葉	言葉の補足説明(西郷竹彦: 文芸研参考)	黒上晴夫氏による19の思考スキルとその定義との関係付け	
低学年	比較(くらべる)	類比されているもの、対比されているものに注目する	④ 比較する 対象の相違点・共通点を見つける
	順序(じゅんじょ)	時間・空間・心情・論理(演繹・帰納)等に注目する	② 順序立てる 視点に基づいて対象を並び替える
	理由(わけ)	ものごとの本質を明らかにするための理由・原因・根拠を考える	⑩ 理由付ける 意見や判断の理由を示す
	類別(ななまわげ)	観点に沿って分ける	⑤ 分類する 属性に従って複数のものをまとまりに分ける
	仮定(もし~ならば)	「もし~ならば」と仮定的・条件的のものごとを考える	⑯ 広げてみる 物事についての意味やイメージ等を広げる
中学年	構造・関係・機能(つなげる)	部分を、常に全体の中の一部であるという関係を忘れずに構造的に見る。関係がないものもある観点で見ることに	① 多面的に見る 多様な視点や観点に立って対象を見る
	まとめる(こうぞう)	よりそこに関係を見いだす (ひらめきや友達の考えをもとに、柔軟な発想ができる)	⑦ 関係付ける 学習事項同士のつながりを示す ⑰ 構造化する 順序や筋道をもとに部分同士を関係付ける
	選択(えらぶ)	自分で、様々な条件を考えながら、その中で一番ふさわしい効果的な表現方法を工夫する (どの観点で誰の観点に立って考えたのかを説明できる)	③ 焦点化する 重点を定め、注目する対象を決める ⑨ 変換する 表現の形式(文・図・絵など)を変える ⑪ 見通す 自らの行為の影響を想定し、適切なものを選択する
	仮説・模式	「きつこうなるはずだ」という見通しを立てて予測する	⑬ 具体化する 学習事項に対応した具体例を示す ⑭ 応用する 既習事項を用いて課題・問題を解決する
高学年	関連・相関・類推	関係的に見ることの更に高度な考え方が関連・相関であり事例をもとにもう一つの事例を考えることが類推である	⑫ 抽象化する 事例からきまりや包括的な概念を作る ⑮ 推論する 根拠に基づいて先や結果を予想する ⑥ 変化を捉える 視点を定めて前後の違いを捉える ⑧ 関連付ける 学習事項と実体験・経験のつながりを示す ⑱ 評価する 視点や観点をもち根拠に基づいて対象への意見をもつ

2 (児童質問紙) 友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか。

指標 「①している」の合計



この指標では、学校としての平均値は目標を達成していないが、学年別に見ると、第5学年では「している」「どちらかといえばしている」の子どもの割合を加えれば100%になる。

友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか。

%	小学校5年	小学校6年	県
している	51.7	46.9	53.2
どちらかといえばしている	48.3	34.4	40.8
あまりしていない	0.0	18.8	5.1
していない	0.0	0.0	0.8
計	100.0	100.0	100.0

このことから、5年生においては、教師が意図して「主体的な深い学び」を各教科で取り入れた実践が成果として現れてきていると考えることができる。今後は、子どもたちに、より自信をもって言い切れるだけの自尊感情を培うことが課題である。

第5学年 算数「面積」の授業実践からの考察

授業者は、この単元で「学びの深まりを実感できる交流場面」のために、以下の3点を実践した。

① 根拠を明らかにして分かりやすく説明するキーワードの明示

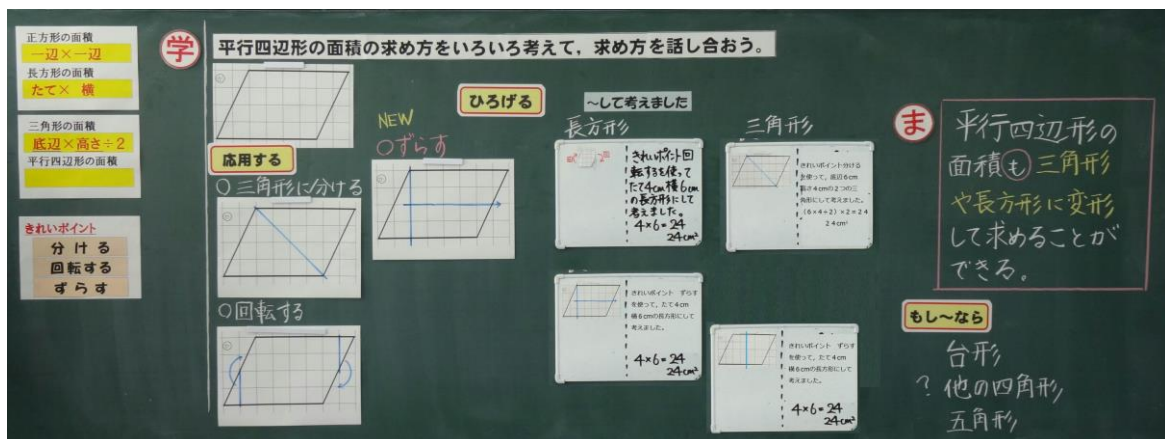
説明をしたり聞いたりする時に、共通理解されたキーワードは交流場面において重要になる。本単元の当初より、「分ける」「回す」「ずらす」の言葉をキーワードとして図形の分割や移動、変形の際に使い、数学的な見方・考え方に高めていけるようにする。

② 試行錯誤と支援の個別化のための個人ホワイトボードの活用

平面図形の求積方法を考えるためには、図形に自由に線をかき、切ったり移動したりした試行錯誤のあとを可視化することが大切である。そこでホワイトボードを用意し、この試行錯誤のあとを、一人一人が自由に動かしたり、キーワードを書き込んだりして説明できるようにする。

③ みんなが参加するグループ活動になるように発表者を変える

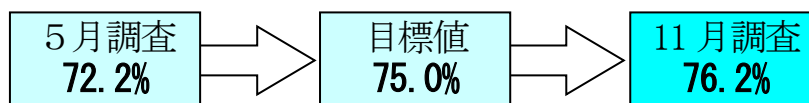
みんなが主体的に参加する交流活動にするために、考えを出す子と発表する子を分けるようにする。そうすることで、考えた子は、より分かりやすくするために説明の言葉を選んだり、発表するためにより集中して聞いたりするようになり、深い学びにつながると考えている。



○ 5年生においては、様々な条件を付けた交流場面を設定することが、子どもたちの意見交換等に有効に働いた。

3 (児童質問紙) 分からない問題があるとき、見方や考え方を変えながら、あきらめずに取り組んでいますか。

指標 「①取り組んでいる+②どちらかといえば取り組んでいる」の合計



この指標の結果についても、細かく分析すると学年差が大きいことが分かる。

昨年度の調査でも、現6年生の意欲が低いことが分かっていたので、今年度の担任は、見方を変えることによって様々な解き方で解決できる単元を選んで、友達同士で切磋琢磨させれば、集中力が身につくのではないかと考え実践を重ねている。

分からない問題があるとき、見方や考え方を変えながら、あきらめずに取り組んでいますか。

%	小学校5年	小学校6年	県
取り組んでいる	41.4	18.8	38.9
どちらかといえば取り組んでいる	48.3	43.8	43.8
あまり取り組んでいない	10.3	34.4	15.1
まったく取り組んでいない	0.0	3.1	2.2
計	100.0	100.0	100.0

第6学年 算数「円の面積」の授業実践からの考察

① 試行錯誤と個別化のための切る場所を示した補助線付き図形や複数の色分けされた図形の活用

複雑な図形の求積方法を考える授業では、様々な方法で試行錯誤する活動ができる。しかし、この試行錯誤の場を、頭の中で考えさせていたのでは、分からない子の意欲化を図ることは難しい。そこで、切る場所を赤い線で示した補助線付き図形を用意したり、1つの図形を複数に分けて考えることができやすいように、問題の図形の裏面にいくつかの色で塗り分けられた状態の図形も用意したりすることで、図形の移動もしやすく、思考の補助にもつながることが期待できる。

② アイデアを共有するためのグループ発表用ホワイトボードの活用

活動を通して一人一人高まった意識をもとに、根拠をもって求積方法を説明することで、数学的思考方を深化・発展させていきたい。そのために、ここではグループ発表用のホワイトボードを活用し、分かりやすい説明となるようにした。



教師の振り返り

○計算しやすくするために、図形の組み替え活動を行った。児童は具体物を使い、机の上で様々な図形に組み替えていた。そのまま計算するよりも1度切ったり組み替えたりすることによって計算しやすい図形に変形させると簡単な式を導くことができた子もいた。

でき上がった図形を上下に並べることで、どのように変化したのか一目で分かった。上の図形の状態では、計算することのできなかった児童が下の組み替えた図形を見ると立式して求積することができた。

○最後の問題では、図形の求積方法を一人一人で作った後、班で話し合うことで、途中までしか考えられなかった児童も説明を聞いて理解を深めることができた。8班中5班が正解し、残りの3班は他の班の発表を聞いてつまずいた箇所が分かり、納得することができた。

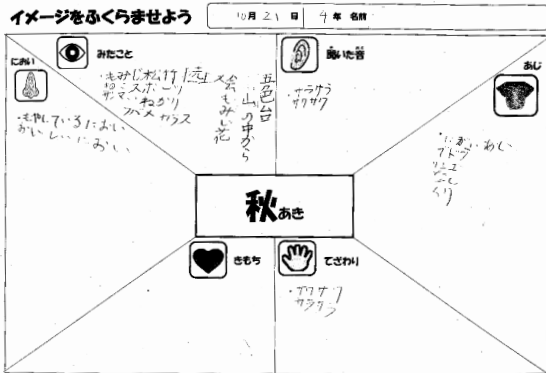
○今後も、一人ではあきらめそうになるところを、友達との協働作業を活用しながら、根気よく学ぶことの大切さを教えていきたい。

◆特徴的な取組

4 ものの見方・考え方を育てる朝活動 かもっ子名句づくり(振り返りの充実)

本校では、平成27年度から季節に合った出来事や行事などから全校で統一したテーマを決め、俳句作りを行っている。一昨年度は「思考力」という観点から取り組みを見直し、名句を作る際にコア・マトリクスという思考ツールを用いてお題となる言葉のイメージを膨らませ、一番ふさわしいと思う言葉を選択して名句を創作するようにした。

〈コア・マトリクスシート〉

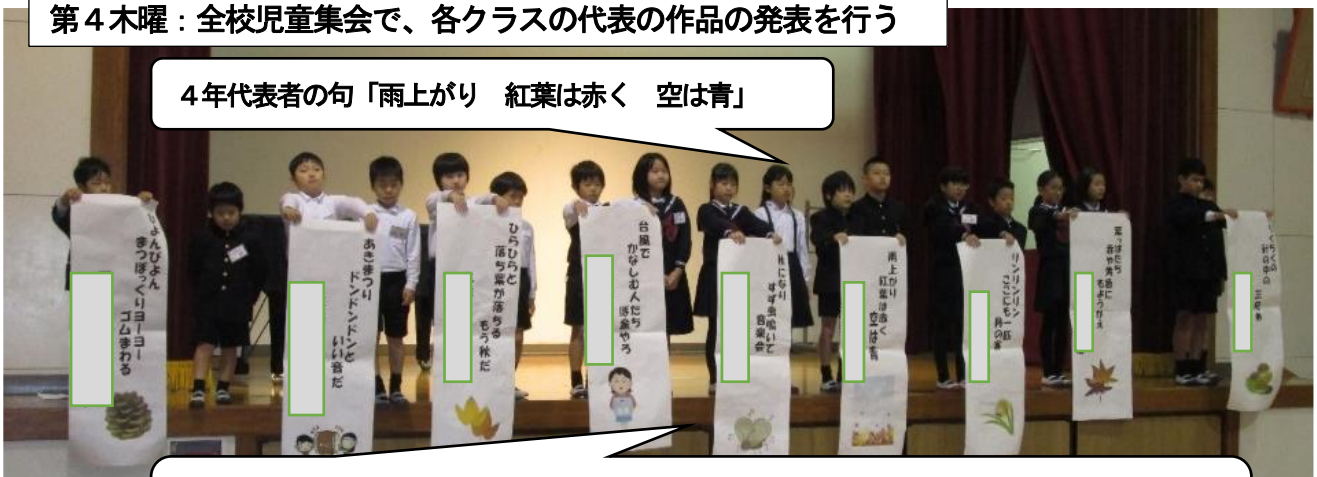


昨年度は「対話的で深い学び」という視点から、全体交流後に自己の振り返りの時間を新たに位置付け、友達の名句から自分が感じたことを書き留めたり、異学年の名句の発表児童に自分の感想を書いて学級の友達に伝えたりするなどの活動を取り入れた。

名句作りが浸透してきた今年度は、思い描いた事象をより相手に伝えるために過去の自分の作品と比較したり、擬人化や反復、擬音語・擬態語などの技法を用いたりすることを意識した。そうすることで、子ども自身の視野を広げ、俳句作りを通した創作活動の充実感にもつながり、友達よさを認め合うことができるようになってきている。

第4木曜：全校児童集会で、各クラスの代表の作品の発表を行う

4年代表者の句「雨上がり 紅葉は赤く 空は青」



4年推薦者 紅葉の赤色と雨上がりの空の色を比べて書いているところがすごいと思いました。自然の美しさがよく分かる詩なので、ぼくは選びました。



紅葉の赤、雨上がりの空を表す青。2つの色を比べていることができているすごいと思いました。



そうですね。色の対比がさわやかな秋を感じさせる句ですね。

体育館での児童集会で各学年の名句を発表し、自分が想像しなかった視点で名句を作っている友達をその場で称賛する場を設定し、司会者は感想を発表してくれた人に、また簡単なコメントをその場で返すようにしている。全校生がいることで、上学年の技法を学んだり、低学年ならではの感じ方に感動したりすることもあり、友達同士から、豊かな「ものの見方・考え方」を学ぶのに良い機会となっている。

5 企画・実践・省察する 縦割り活動（振り返りの活用）

○ 「かもっ子お楽しみツアー」における取り組みを通して(新企画)

計画



昨年度までは運動場で「全校警泥」などを行っていたが、暑い時期ということもあり、校内で各教室を巡るゲームツアーをしようという意見が出された。7月1日の「かもっ子お楽しみツアー」で、どの班がどんなゲームをするか話し合った。企画の話し合いでは、どの学年もみんな楽しめることを共通理解し、意見を出し合った。

準備



ゲームが決まると次はすぐに準備を始めた。ここでは準備の時間を2時間とあえて短く設定した。短い中で、みんなで分担して効率的に作業に取り組むことができた。

1年生たちが喜んでくれるといいな。



6年生同士で実際にやってみて、下級生側の6年生たちが感想や課題を言い、みんなで解決策を話し合った。

1年生は今の説明で十分に分かるかな？
実際にモデルで示して、下級生に見せようよ。



ツアーを成功させるために5年生にも事前に説明して、下級生の誘導等協力をお願いした。

6年生は教室で待っているから、5年生がみんなを誘導して各教室を回ってね。

実践



〈じゃんけん大会の様子〉



〈学年に合ったレベルの手品を披露〉



〈学校O×ゲーム〉

振り返り

〈よさと改善点を各自でもちよって班で意見をまとめ話し合う〉



後日、振り返りの時間を設け、下級生からのアンケートや感想を読みながら、よかったところと次回への改善点を話し合った。

みんなが楽しんでくれてよかったな。
6年生へのメッセージもたくさん書いてくれて嬉しいな。

自分たちは喜んでくれると思って活動したのに、「面白くなかった」と言われたとき、がっかりしてやる気を失うのではなく、何が面白くなかったのか、説明の仕方や遊びの難しさが低学年には難しかったのだろうか、というような相手の立場に立った見方ができる6年生が増えてきている。

IV 研究の成果と課題

1 主体的・対話的な深い学びの成果

(1) 児童質問紙の分析から推測できること

授業の中で、まず自らの考えをもつ「主体的な深い学び」の場を必ず設定するようにしたこと、また、特別活動の中で、友達との「対話的な深い学び」となる振り返りの場を確保するようにしたことにより、子どもの意識が少しずつ変わってきている。

『話し合い活動で、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか?』という質問に対して、「どちらかといえばできている」と回答した子どもが増えている。

また、『友達の意見に「なるほど、その通りだ」と納得することがありますか?』という質問に対しても同様に肯定的な評価をした子どもが増えている。

これらのことから、自分だけの考えで判断し行動することよりも、友達との意見交換をして、その情報を参考にしながら自分で考えて行動することに価値を見出す子どもが増えてきていると推測できる。

(2) 相手意識を考える子どもが育ってきている

話し合い活動の充実により、自分の意見と異なる友達を認めることができ、友達の考え方を取り入れ、さらに自分の意見を深めようとする姿が見られた。

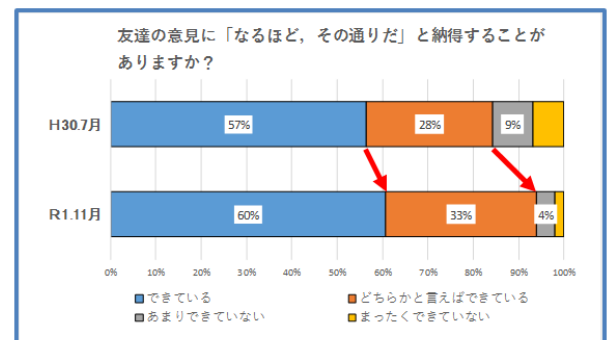
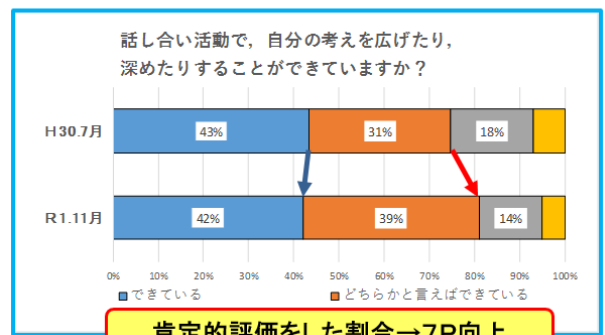
特に6年生においては、『下級生の気持ちを考えて行動できていますか?』という質問に対して、自信をもって言い切ることのできる児童の割合が大きく向上した。

また、学校全体としても、『友だちのいいところを見つけることができますか?』という質問に関して、「できている」と自信をもって回答した子どもの割合が増加していることから、互いに認め合いながら成長しようとする社会的自尊感情が高まりつつある。

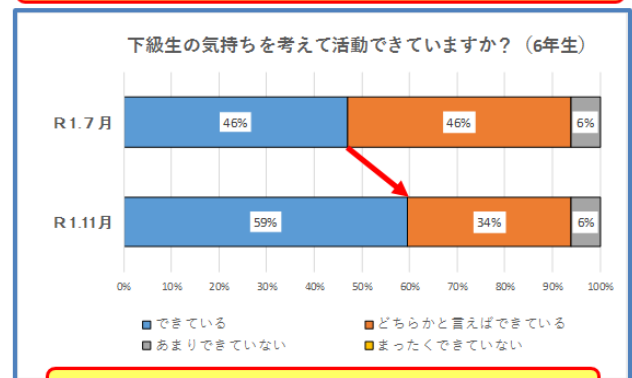
2 継続するための方法を考える

毎年、子どもたちは学年が上がり次の段階へと成長する。しかし教職員の場合は、毎年数名の人事異動があり、共通理解のもと研究を進めていても、管理職や現教推進の中心となっていた者が異動した場合は研究が停滞することが考えられる。したがって、メンバーが替わっても、継続実践できる方法を考える必要がある。

アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業実践から



ふれあい活動における実践から



これまでの研究の取り組みから

